

かんもくの会だより

第2号

目次

○会報第2号発行のご挨拶	浜田貴照	p. 2
○関西地区の活動	かわ	p. 3
○専門家から 緘黙症経験者を対象としたアンケート調査より	広瀬慎一	p. 4
○百文は一会にしかず～保護者の集まりから	わかやま	p. 5
○編集後記	高木潤野	p. 6

本稿は、場面緘黙症(選択性緘黙症)に関する研究や研修会などで自由にお使い下さい。お知り合いの緘黙児の保護者や、教育機関・医療機関の方々に配布して下さっても構いません。ただし、上記のような緘黙症の知識の普及など関係のない目的で使用する場合は、事前に当会へ使用目的をお知らせ下さい。検討のうえ、使用の可否を判断します。とくに、商用目的で本稿全体、または一部を無断で使用することは固くお断りいたします。使用を希望される場合は事前に当会へお知らせ下さい。また、本稿は、かんもくの会のホームページからもダウンロードできます。

第2号発行 2013年8月4日

発行：かんもくの会

ホームページ：<http://asmjapan.org/>

かんもくの会だより第2号

代表 浜田貴照

会報第2号発行のご挨拶

この度、会報第2号を発行しました。4年前に会報の第1号を試みに作成しましたが、その後、途絶えていました。今回、新たにスタッフに恵まれたおかげで、第2号を作成することができました。ご協力して下さった皆さまにお礼を申し上げます。

かんもくの会は2006年に当事者2名でスタートしました。2013年5月末時点の会員数は、当事者会員が約110名、保護者等の家族会員が約130名、その他の専門家等の会員が約10名になっています。私たちは現在、会員同士が交流できる機会を提供することと、自分たちの実体験を語ることによって社会に緘黙の実態をお知らせし、支援や研究の促進をお願いすることを柱にして活動しています。対外的な活動では、おかげさまで多くの方々に私たちの訴えをご理解頂き、問題解決のためにご助力を賜っています。

しかし、会内では、会員が増えたことで、交流がしにくい状況になっています。会員が50人ぐらいまでの頃は、掲示板を使ってもらうなどして会員同士がお互いをよく知ることができました。ですが、会がお互いに顔の分かる規模を超えるにつれ、掲示板の書き込みが減りました。現在は、人はたくさんいるのに、会員サイトは静かになっています。本来、会を小グループに分けるなど、規模に合わせた体制を作らなければならないのですが、残念ながらそれができず、ご不便をおかけしています。幸い、地域によっては、有志の方たちが自主的に集会を開いて下さっているので、足を運べばじかに交流を求めることができます。しかし、その他の地域では、ほとんど交流の機会がないと思います。このような状況を少しでも改善するために、会報が必要だとずっと思っていました。会報が皆さんの交流の助けになることを願っています。

日本特殊教育学会の年次大会で開催しているシンポジウム

緘黙の支援を訴える活動の一環として、2007年より日本特殊教育学会の年次大会で毎年シンポジウムを開かせて頂いています。シンポジウムは、当会の発足当初よりご支援を賜っている関西国際大学の藤田継道先生のご提案によって始まりました。毎回、藤田先生に共同企画者と司会者を務めて頂いています。シンポジウムでは、緘黙の実態を知って頂くために、かんもくの会の会員さんに体験をお話ししてもらっています。昨年の2012年度の大会では、お子さんの緘黙の支援に取り組み、ご自身も緘黙の当事者である松田明子さんにお話しして頂きました。

今年の特種教育学会の大会は8月30日から9月1日まで東京の明星大学日野キャンパスで開催されます。私たちは「緘黙症当事者の多様性と類型化—個性に応じた対応のために」と題してシンポジウムを開きます(9月1日午前9時30～11時30分、28号館519号室)。今回は信州かんもくサポートネットワークを主宰されている長野大学の高木潤野先生に話題提供をして頂きます。指定討論者は上越教育大学の加藤哲文先生と行動コーチングアカデミーの奥田健次先生です。私も話題提供をさせていただきます。

関西地区の活動

かわ

2013年5月5日、大阪で当事者集会をしました。参加者は5人、大阪の北区民センターの会議室で活動しました。内容は主にゲームとテーマトークです。まずはトランプなどゲームをして少しでも緊張がほぐれるようにしました。テーマトークでは、参加者からテーマを募集し、幹事の方では、現在のつらい気持ちを吐き出したい人が十分話せるようなテーマを用意しました。今回のテーマは「入会した動機」「授業中はどうしていましたか?」「今つらいこと」「どうしたら克服できるか?」「G.Wの思い出」「嫌いな食べ物」の話をしました。「今つらいこと」では、困っていることをみんなで話し合っ解決しました。最後に個人的に聞いてみたかった「周囲が受け入れてくれるなら緘黙のままでもいいか?」ということ聞いてみました。「伝えたいことは伝えられるようにしたい」「他の人と比べて落ち込む」「受け入れてくれたら逆に喋れるのではないか(話さないといけないとプレッシャーになって話せないから)」という意見が出ました。まずは喋りにくいということを周りに理解してもらうということが緘黙の人にとって大事なことだと感じました。今回は少人数でしたが、一人一人の話がたくさん聞いて濃い集会ができたように思います。

同じ経験をした者同士で集まれることはとても貴重

会議室での集会は2013年2月3日の大阪集会が初めてでした。その日は12名の参加者が集まり、今までの集会と比較するとかなり大人数になりました。テーマトークでは司会をつけて「緘黙が原因の二次障害」「周りに理解されているか」「緘黙は不幸か」「どう克服したか」「最近嬉しかったこと」「趣味」について話をしました。最初は少し緊張感がありましたが、今までにない感じの集会になってよかったと思います。

その前の集会ではボーリングをやったり、カラオケボックスで話をしたりという活動をしました。当事者の人にとって、どんな場所で、どのような活動が参加しやすく安心できるものなのかを試行錯誤しながらやっています。集会後には参加者の人たちにアンケートをとり、次の集会に活かせるようにしています。また、活動の様子や場所の写真をホームページで閲覧できるようにしています。集会に参加できなかった人たちのために、活動の報告ができればと思って写真をアップしていくことにしました。

集会で同じ当事者の人と会って話をすると、共感できるものが多く、新しく気付かされるものもありました。普段周りに緘黙について相談できる人はなかなかいないと思います。緘黙のことを話したとしても、「話せない感覚が分からない」と言われたり、「そうだったんだ～」の一言で返されたりしていたので、同じ経験をした者同士で集まれることはとても貴重なものだと感じました。また、当事者同士でも、興味のあるものや得意なものが違い、面白いなあといつも思われます。今後も定期的に集会をやる予定なので、もっと多くの人たちと出会い、交流を深めていければと思います。

【専門家から】緘黙症経験者を対象としたアンケート調査より

広瀬慎一（札幌市スクールカウンセラー）

「緘黙症経験者の回復プロセスが知りたい」。これが動機となり、アンケートの作成作業は始まりました。そして、かんもくの会の会員の皆さまを対象として、過去の場面緘黙に関する経験と現在の回復の状態についてお聞きしました。このアンケート調査は2年前に実施され、すでに結果を会員の皆さまにお伝えしています。今回は、前回の結果からさらに考察を加えましたので、この場を借りてお伝えしたいと思います。

最近の研究では、緘黙の状態が維持されるメカニズムに焦点が当てられ、支援方法の検討が進められています。つまり、過去の要因よりも、緘黙が維持されている現在の要因を重視し、「緘黙が起こりやすい状況、緘黙が起こった後の状況」という緘黙の前後関係を検討していくこととなります。それによって、緘黙のもつ機能（目的、意味）が明確になってきます。したがって、今回の考察においても、このことを重視しています。

「共通していることは何か」

今回の考察も、この考え方に基づいて進めていきます。研究が非常に少ない分野においては、まずは問題に共通していることを探っていくことで、明らかになっていない新たな発見につながります。それでは、アンケート調査により明らかになりました緘黙と発話が起きている状況について具体的に説明していきます。

緘黙は、「リラックス型」と「緊張型」に分類することができます。リラックス型では、話すことの必要性を認識しにくい、あるいは話すことを強要されない、といった状況により安心感を得やすい環境に置かれています。そのような環境においては「話すことができない自分」という自己イメージが強まるため、緘黙が維持されやすくなります。

一方、緊張型では、「話したい」という願望はありますが、自分が話した直後の周囲の反応（たとえば、驚いた表情で見られる、笑われる、など）を予想してしまうため、話すことやコミュニケーションに対して恐怖を感じやすくなります。そのため、特に話さなければならない場面において、緊張状態でいることとなります。

発話は、周囲から「話せない人」というレッテルを貼られている環境か否かによって、話すことができるまでのプロセスが異なります。レッテルを貼られている環境では、「話すことを強要されない」という体験が必要となります。一方、レッテルを貼られていない環境では、自分自身に対して目標を課すことが必要となります。どちらの環境においても共通することとして、「自分が話すことができている状況を具体的に考えてみる」ということがあります。さらに、このときに、周囲から「適切な反応が返ってくる（たとえば、話したことを話題に取り上げることなく会話が進む、驚かない、笑われない、など）」ということを実感できることが重要です。

先述の「維持されている」という表現は、「習慣、癖になっている」と言い換えることができます。習慣や癖は、何らかの行動が繰り返された結果です。緘黙も「習慣、癖」です。したがって、その繰り返される状況において「共通していることは何か」という視点をもつことが、緘黙の理解を深めるために必要となってきます。

※今回の研究結果は、あくまで全体的な傾向を示すものであり、必ずしも個人に合致するとは限りません。

百文は一会にしかず～保護者の集まりから～

保護者会員：わかやま

保育園入園をきっかけに、娘の「場面緘黙」に気が付き、手探りの情報収集の中で、かんもくの会に出会い、入会しました。

入会はしたものの、ネット上の情報収集ぐらいで、関東集会に参加することはありませんでした。「ネット」という世界から現実の「集会」へと一歩踏み出すのは勇気がいることだったからです。

そんなとき、掲示板の書き込みがきっかけで、集会参加へのお声掛けを頂き、当事者・保護者の参加する関東集会に参加することになりました。

保護者会員の方々の話されることは、「そうなんです！」と共感できることで、当事者会員の方々の話されることは、普段聞きたくても聞けなかった「我が子」の言葉のように感じました。なにより、ネット上の文字ではなく、本人の口から話される生の言葉は、心に響きました。こうやって悩みを共有・共感できたことで、いままで感じられなかった安心感と勇気をもらうことができました。

それと同時に、保護者が主体に取り組み、悩みや情報を共有できる「親の会」が必要なのではないかと思ったのです。

そのときに一緒に参加していた保護者会員の方々と話し合い、関東に「親の会（つぼみの会）」を立ち上げることにしました。

「場面緘黙」に関するあらゆる情報を共有できるように、どの団体にも属していない、というスタンスではありますが、立ち上げるきっかけや原動力をくれたのは、「かんもくの会」の存在であったと思っています。

場面緘黙のお子さんの年齢や状態はみんなそれぞれ違いますが、親の悩みや苦労はよく似ている、ということを集会の度につくづく感じています。

ひとつは、信頼をもって頼れる場所がなかなか見つからない、ということです。普通なら頼れる場所であるはずの幼稚園・学校という教育機関や療育施設に、場面緘黙に対する知識や情報が乏しいため、「子どもにとって、本当にこれでいいのだろうか」といつも不安を抱えています。

そして、親子で孤立感を感じていることも少なくありません。学校や医療機関からも「焦らないで」「様子を見ましょう」など、少し突き放されたような指導をされた印象をもってしまったり、保護者関係では、子ども同士のつながりがいいことから、輪に入りにくい状態になってしまったりしてしまうからです。

集会では、そんな悩みや苦労を共有し、また挑戦していることや成功談失敗談など情報交換をすることができます。疲れた気持ちや吐き出したかった気持ちをお互いに聞きあうことで、すっきりして、またがんばろうとリセットできる場でもあると思います。

関東だけでなく、関西でも親の会「さくらんぼの会」が発足しました。大阪を中心に3年ほど前から数カ月に一度、親のおしゃべり会をされています。小学校高学年から成人のお子さんがいらっしゃる比較的長い間、子どもの緘黙と向き合ってきた親御さんが多いそうです。

逆に、関東では幼稚園から小学校低学年の保護者層が多いので、関東と関西で今後も情報交換をして、より充実した親の会にしていけたらと思います。

保護者・当事者問わず、ネットを主に広がっている「場面緘黙」の情報ですが、掲示板等の文字から、一歩勇気を出して、集会に参加してみてもどうでしょうか？

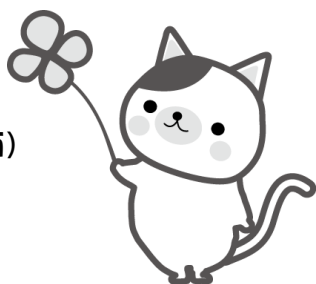
「つぼみの会(関東)」

窓口：わかやま

「さくらんぼの会」(関西)

窓口：桃花

はなえ



編集後記

編集者を代表して（高木潤野）

かんもくの会だより第2号をお届けいたします。無事第2号が発行できましたのは、原稿の執筆・編集を担当して頂いた方をはじめ、かんもくの会を支えて頂いている皆さまのおかげと思い、厚く御礼申し上げます。

文部科学省が2012年に実施した調査では、小中学校の普通のクラスに学習障害（LD）や注意欠陥多動性障害（ADHD）など「発達障害」が疑われる児童・生徒が約6.5%在籍していることが明らかになりました。文科省は2002年にも同じ調査をしており、その時は約6.3%とほとんど同じ数値が発表されています。今と違うのは、当時は（たった10年前の話ですが）LDやADHDということばを知っている人はほとんどいなかったことです。それから10年間で、「発達障害」への理解は急速に進みました。今では、（理解度に差はあるものの）教育や医療、福祉関係者で「発達障害」ということばを知らない人はいません。

では、緘黙はどうでしょう。法律上は「発達障害」に分類することが可能ですが、「緘黙」と言っても「なんですか？」と聞き返されてしまうことがしばしばです。当然、文科省の調査にも入っていません。「周りに同じ悩みを持つ人がいない」「誰にも理解されない」という思いを抱えている当事者や保護者は、今でもとても多いです。

それでも、将来は暗くありません。支援のための枠組みはすでにあり、関心を持つ専門家や関係者も徐々に増えつつあります。あとは、「誰でも知っている」という状態にすることができれば、緘黙の支援は格段に進みます。10年後には、緘黙のことなら誰でも知っている、本屋には緘黙の関係の本が当たり前にならんでいる、どこの医者についても適切な治療が受けられる、顔の見える小さな交流のための組織が全国あちこちにある、先輩の保護者が小さな子どもを抱える保護者の悩みを笑って受け止められる…。そんな社会を目指して、かんもくの会の活動をますます活発にしていけたらと思っています。皆さまのお力をぜひお貸し下さい。